

この「広報ひこね」は48,350部作成し、1部当たりの単価は7円（1円未満切り捨て）です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。

連載企画 「わたしの町の戦国 第6回」

佐和山とその時代① 境目の城

佐和山は、北に入江内湖、西に松原内湖が広がり、東の鈴鹿山脈との間の狭小な地帯を東山道の通る要衝の地であり、古来、幾多の戦争の舞台となりました。

この佐和山の地に、城が築かれた時期は定かではありません。ただ、古い文献は、鎌倉時代初期、近江を領した佐々木定綱の6男六郎時綱が、佐和山付近に館を構えたのが始まりと伝えています。時綱は自ら佐保と号しており、当時は佐和山のことを佐保山とも称したようです。

その後、定綱の孫の代に至り、近江は佐々木一族4家によって割拠されることになります。宗家を継いだ六角氏、坂田郡柏原庄（米原市）を本拠とした京極氏、坂田郡大原庄（米原市）を本拠とした大原氏、高島郡高島庄（高島市）を本拠とした高島氏の4家でしたが、なかでも六角氏と京極氏は近江を二分する勢力に成長し、やがて同族でありながら互いに牽制をして争うようになります。

両者の勢力の境に位置する佐和山は、要害の地として城が整備され、在地の国人・土豪（村々に

本拠を置く武士）たちを巻き込んだ攻防戦が繰り返されることになりました。

16世紀に入ると、江北では京極氏の被官（家臣）から台頭した浅井氏が覇権を確立しようとする勢力を拡大し、逆に再興を計ろうとする京極氏、江南の覇者六角氏の3者が、文字どおり三つ巴の争いを展開します。この争いにおいて、佐和山城はしばしば3者の攻略の目標となりました。

ただ、佐和山城は境目の軍事拠点として臨時に利用されたため、特定の城主が置かれず、そのため山下に本拠のある百々氏などが佐和山城を預かって、時に応じて城代を務めたと考えられています。

永禄年間（1558）に入ると、近江では浅井氏の勢力が急速に拡大し、高宮氏や高野瀬氏など犬上郡・愛知郡の国人・土豪の多くが六角方から浅井方に転じました。そのため永禄2年（1559）には「肥田城の水攻め」、翌永禄3年には「野良田表の合戦」など、六角方による大規模な反撃が試みられましたが、いずれも失

敗しています。

そして永禄4年（1561）、六角承禎は浅井長政らが美濃（岐阜県）に出兵している虚を衝いて佐和山城を攻略し、浅井方の城代百々隠岐守を自決させています。浅井長政は、すぐさま佐和山城を奪い返し、重臣であった磯野員昌を据えました。

磯野員昌は、多賀社（多賀大社）の相論に仲介者として介入するなど、浅井氏から佐和山一帯の地域支配をまかされており、城代ではなく城主として居城しました。佐和山城は、これまでの臨時の軍事拠点から、日常的な政治・経済の拠点となる新たな時代を迎えたので

す。

員昌の佐和山城主は、織田信長との「佐和山籠城戦」で降伏するまでの10年間におよびました。次

佐和山城跡の大手から本丸方面を望む



回は、その「佐和山籠城戦」について紹介します。

問い合わせ先 困教育委員会文

化財課 ☎26-5833番、F

A X 26-5809番、Eメール:

l: bunkazai@mx.hikone.

ed.jp

